

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22401009

研究課題名（和文）

グローバル化時代における南北アメリカの国家・市民社会・社会運動

研究課題名（英文）

State, Civil Society, Social Movements of Americas in the Era of Globalization

研究代表者

鈴木 茂 (SUZUKI SHIGERU)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：10162950

研究成果の概要（和文）：

本研究では、先住民とアフリカ系人の市民権拡大を求める運動と国家による社会的包摂政策、とりわけ多文化主義政策の調査・分析を通じて、ラテンアメリカ諸国を中心とした南北アメリカにおける国家と市民社会の関係の現状を析出した。その成果の一端は、ペルーとメキシコにおいて現地の研究者とともに国際セミナーを開催して議論したほか、国内学会での個別報告や学会誌での論文発表を行い、最終年度に成果報告書を作成した。

研究成果の概要（英文）：

In this project, we analyzed the contemporary relations between the state and the civil society through field researches of the civil rights movements of indigenous and African-descendants and the social inclusion policies, especially the multicultural ones promoted by the governments of Americas. The results were presented in two international seminars held at Lima, Peru, and Toluca, Mexico, and domestic academic meetings and published on academic journals beside the final report.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2011年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2012年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：グローバル化、市民社会、社会運動、多文化主義、アフリカ系人、先住民

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代後半から1990年代にかけて、ラテンアメリカ諸国が経験した民主化過程においては、権威主義体制から民主主義への政治体制の移行にとどまらず、女性、先住民、アフリカ系人などのマイノリティーの権利拡大が図られ、民主主義の内実そのものの転換が起きたことが指摘されてきた。こうした

動向は、一般にラテンアメリカでは「多文化主義」と総称され、とくに国家の公共政策として実施される場合、「公定（官製）多文化主義」とも呼ばれる。本研究プロジェクトに先行する科研費助成研究「グローバル化時代の多文化主義と社会運動」（基盤研究 B、海外、研究代表者：鈴木茂、平成 18～20 年度）では、このラテンアメリカ諸国における「多

文化主義」について、民主化過程を押し進めた重要な主体を構成したアフリカ系人と先住民の「新しい社会運動」＝権利獲得運動の現状・歴史意識・課題と、グローバル化という状況の中で「公定（官製）多文化主義」が正当性を獲得した重層的な要因を明らかにした。その中で浮上したのは、こうした新しい社会運を生み出した「公論の場」＝「(対抗的)公共圏」がいかなるものであり、従来の「国民的な言説空間」をどこまで変革し、どのような可能性と限界をはらんでいるか、という問題である。この点で、とりわけブラジルやベネズエラ、エクアドルやボリビアといった社会運動を基盤として成立した政権下において、政治参加の拡大＝社会的包摂が民主主義の実質化、市民権概念の転換にどのような意味を持つのかを、改めて問い直す必要があり、ラテンアメリカ地域全体の趨勢との比較も必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

ラテンアメリカ諸国の重要な特質の一つは、その人種的・民族的多様性にある。したがって、ラテンアメリカ社会の分析にとって、人種・エスニシティの観点は不可欠であるといえる。しかるに、従来のラテンアメリカ各国における国民統合の論理は、人種・江洲にシティの多様性を問題視し、その差異を消去してマイノリティーに同化を迫るものであった。本研究プロジェクトは、国家と市民社会の関係や市民権概念の転換にとって、国民や階級には還元できない、人種・エスニシティの側面の分析が重要であるという立場から、現代ラテンアメリカ諸国における国家・市民社会・社会運動の3者の関係について、次の4つの大きな研究課題を設定した。

(1) 社会運動と政府とのパトロン・クライアント関係、あるいはコオプテーションを通じた政府による社会運動の取り込みが持つ、グローバル化状況における新しい意味をあきらかにする。

(2) 多文化主義が受容される一方で、ブラジルなどでは、マイノリティーの平等な権利を実現する手段としてのアフーマティブ・アクション導入の是非をめぐって論争が起きている。「個の自律」を標榜する新自由主義的な社会的・政治的文脈の中で、民主主義の実質化との関連でこの論争が持つ意味を明らかにする。

(3) メキシコとペルーにおける人種的・民族的マイノリティーの社会運動と国家との関係を明らかにする。メキシコでは、多文化主義的な先住民政策が掲げられている一方で、社会・経済政策においては人種・エスニシティを格差の要因として認めず、普遍主義的（ユニバーサル）な貧困対策が強い説得力を発揮している。また、ペルーでは、先住民

やアフリカ系人の社会運動は、ボリビアなど社会構成が似た諸国に比べて脆弱である。

(4) ラテンアメリカ諸国にとって、アメリカ合衆国は歴史的に種々の面で規範となってきた。アメリカ合衆国における公民権運動の経験や多文化主義をめぐる議論と、ラテンアメリカ諸国における近年の議論・政策にはやや「ズレ」が見られるが、それがどのような要因や背景から生まれているのかを明らかにし、国際的な公論の場のありかたを検討する。

## 3. 研究の方法

(1) 現地調査。本研究プロジェクトでは、各研究対象国について複数の研究分担者・研究協力者を配置し、相互の協力しつつ、現地の研究協力機関・協力者と連携をはかって現地調査を行うこととした。調査対象は、先住民、アフリカ系人の社会運動団体・活動家、多文化主義政策の政策担当者に絞り、聴き取りおよび資料収集を行った。また、後述の国際セミナーに合わせ、参加者を中心にペルーとメキシコにおいて合同調査を実施した。

(2) 研究成果の現地への還元と現地研究者との意見交換を目的として、ペルーとメキシコにおいて公開の国際セミナーを開催した。本研究プロジェクトの研究分担者・研究協力者が報告者・コメンテータを務めるほか、現地の共催機関の協力を得て、先端的な研究に取り組んでいる現地研究者を報告者・コメンテータとして招いた。

(3) 海外から専門研究者を招いて先行研究の到達点を議論するため、日本国内で国際セミナーを開催した。その際、本研究プロジェクト単独の研究会に加え、アジア経済研究所等、関連分野の研究機関と合同の研究会や講演会を開催して議論を深めるのに努めた。

## 4. 研究成果

3年間の調査・研究活動を通じて、現在のラテンアメリカ諸国における国家・市民社会・社会運動の関係のあり方を考察するにあたって、政治参加の深度と公論の場の成熟度が大きなカギになることが明らかになった。

(1) 第一に、先住民やアフリカ系人の社会運動が市民社会の主体性をいっそう活性化させていることが確認できた反面、ブラジルやベネズエラ、ボリビアなど社会運動を基盤としたり多文化主義を標榜したりする政権の成立によって、新たなパトロン・クライアント関係の登場やコオプテーションを通じた国家と社会運動の関係の変質が見られることも明らかになった。

(2) ブラジルにおける人種に基づくアフーマティブ・アクションの導入とその是非をめぐる論争は、市民権に関する公論を活性化させ、多文化主義下における国家の役割と市

民社会との関係をめぐる議論が深まる契機となった。2009年に保守政党から提訴された、連邦大学における黒人志願者への入学枠の設定の意見の申し立てに対し、2012年4月に連邦最高裁判所が判事全員一致で「棄却」判決を下したことは、ブラジルにおける多文化主義の浸透を物語っており、市民権概念の転換を確定する出来事であったと評価できる。

(3) ペルーにおける多文化主義の議論は、近隣諸国に比べていまだに微弱である。これには1980年代以降の国家及び左翼ゲリラによるテロリズムという同国の特殊な事情が大きな要因の一つであることが指摘できる。ただし、従来、ほとんど公論の場に登場することのなかったアフリカ系ペルー人の社会運動の成長が確認され、今後の動向が注目される。一方、メキシコにおいては、先住民共同体が機能している地域において、先住民の慣習法の適用が実現していること、オアハカ、ベラクルス等におけるアフリカ系コミュニティが、ペルー同様、メスティソという伝統的な国民像の見直しを要求しており、多文化主義の潮流と無縁でないことが確認できた。

(4) とりわけ多文化主義をめぐり、アメリカ合衆国とラテンアメリカ諸国の議論の「ズレ」については、ブラジルの黒人運動にアメリカ合衆国の経験や思想の「流用」が見られる点が興味深い。グローバル化の中で人種平等や人権などの普遍的な価値の拡大が進む一方、各国の固有の歴史的・社会経済的・政治的条件の下でそれらの価値を実現するには、そうした固有の条件の分析と方法の可能性・限界を精査する必要がある。人種平等が具体的な政治的アジェンダに乗るようになったゆえに、より個別の文脈に即した議論が行われるようになっていとも考えられる。

(5) ペルーとメキシコでの国際セミナーでは、17本の個別報告と1本の記念講演が行われた。現地及び開催国以外から招聘した報告者の報告は、いずれもアクチュアルな現状を伝える貴重なものであった。そこで、本研究プロジェクトの研究分担者・研究協力者の報告と合わせ、全報告原稿を本研究プロジェクトの最終報告書としてまとめた。今後、正式な論文集の刊行を模索してゆくことにする。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計14件)

①石橋純「ベネズエラ民謡〈ホローポ〉の創造-知識人と民衆知」細川周平編『民謡から見た世界音楽』ミネルヴァ書房、2012年、255-271頁。

②新木秀和「グローバリズムと反グローバリズム-市民運動の政治学」菊池務・畑恵子編『ラテンアメリカ・オセアニア』ミネルヴァ書房、2012年、113-133頁。

③Araki Hidekazu, "Movimientos étnicos y multiculturalismo en el Ecuador: pueblos indígenas, afrodescendientes y montubios," 『人文研究』査読有、176号、2012年、33-57頁。

<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/public/pdf/no176/17606.pdf>

④青木利夫「20世紀メキシコの農村教育と農村教師」『三色旗』、775号、2012年、4-9頁。

⑤後藤雄介「社会運動の(不)可能性に関する考察-現代ペルーを中心に」『学術研究(人文・社会科学編)』61号、2012年、293-300頁。

⑥禪野美帆「メキシコ市内旧先住民村落の「公的認定」をめぐって:「地元民」が期待すること」『商学論究』第60巻12号、623-645頁。

⑦新木秀和「メスティサッへと多文化主義のはざまで一エクアドルにおける先住民の包摂と排除」『人文学研究所報』査読有、46号、2011年、53-66頁。

<http://human.kanagawa-u.ac.jp/kenkyu/public/pdf/syoho/no46/4604.pdf>

⑧受田宏之「貧困対策を取り入れた新自由主義-メキシコの事例」『歴史学研究』査読有、886号、2011年、64-74頁。

⑨鈴木茂「「人種デモクラシー」への反逆-アブディアス・ド・ナシメントと黒人実験劇場(TEN)」真島一郎編『20世紀<アフリカ>の個体形成-南北アメリカ・カリブ・アフリカからの問い』平凡社、2011年、139-162頁。

⑩鈴木茂「南北戦争とラテンアメリカ-ジェラルド・ホーン『最も遠い南部-アメリカ合衆国、ブラジルとアフリカ奴隷貿易』(2007年)によせて」『アメリカ史研究』査読有、34号、2011年、84-95頁。

⑪新木秀和「エクアドル・ヤスニ ITT イニシアティブの意義と課題(上・下)」『先住民の10年NEWS』170-171号、2-4頁、2-4頁。

⑫Aoki Toshio, "El centenario de la independencia como espacio social: el caso de Guadalajara, México," 『文明科学研究』査読有、6号、2011年、13-20頁。

<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00033131>

⑬禪野美帆「メキシコにおける「先住民」の定義とメキシコ市内旧先住民村落の「地元民」」『史林』査読有、91巻1号、2011年、153-183頁。

⑭青木利夫「メキシコにおける農村教師養成の歴史に関する一考察」『文明科学研究』査読有、5号、2010年、21-34頁。

<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/0003312>

〔学会発表〕(計14件)

- ① Ukeda Hiroyuki, “¿Dinosaurio o democracia participativa?: Política informal entre partido izquierdista, movimiento social y los pobres en la Ciudad de México,” Seminario Internacional “Ciudadanía y Movimientos Sociales :En Búsqueda de la Inclusión,” 2012年9月6日, Museu Nishizawa, Toluca-Estado de México (メキシコ)。
- ② Zenno Miho, “El reconocimiento de las colonias de D.F. como pueblos originarios,” Seminario Internacional “Ciudadanía y Movimientos Sociales :En Búsqueda de la Inclusión,” 2012年9月6日, Museu Nishizawa, Toluca-Estado de México (メキシコ)。
- ③ 新木秀和「エクアドル・コリア政権の事例」日本ラテンアメリカ学会第33回定期大会、パネルC「ポスト新自由主義期ラテンアメリカにおける民主主義の課題」、2012年6月2日、中部大学。
- ④ 鈴木茂「人種主義の可視化とアフターマティプ・アクション—ブラジルにおける混血言説と黒人運動」第62回日本西洋史学会大会、2012年5月20日、明治大学。
- ⑤ Ukeda Hiroyuki, “Organic Agriculture in Mexico and its Promotion by Universidad Autónoma Chapingo,” The 1st International Symposium on Environmental Friendly Agriculture Based on Community Resources, 2012年3月3日、東京大学。
- ⑥ Araki Hidekazu, “Movimientos étnicos y multiculturalismo en el Ecuador: pueblos indígenas, afrodescendientes y montubios,” Seminario Internacional “Estado, Ciudadanía y Movimientos Sociales en Tiempo de Globalización en las Américas,” 2011年9月6日, Instituto de Estudios Peruanos, Lima (ペルー)。
- ⑦ Goto Yusuke, “Algunas reflexiones sobre las (im)posibilidades de los movimientos sociales en Perú: factores ‘impedidores’ que los onstaculizan desde ‘fuera’,” Seminario Internacional “Estado, Ciudadanía y Movimientos Sociales en Tiempo de Globalización en las Américas,” 2011年9月6日, Instituto de Estudios Peruanos, Lima (ペルー)。
- ⑧ Suzuki Shigeru, “Movimiento Negro y la transformación de ciudadanía en Brasil: la importancia de acciones afirmativas en la admission de universidades públicas,” Seminario Internacional “Estado,

Ciudadanía y Movimientos Sociales en Tiempo de Globalización en las Américas,” 2011年9月6日, Instituto de Estudios Peruanos, Lima (ペルー)。

⑨ 禪野美帆「都市に居住する先住民—メキシコ市内旧先住民村落に関する文化人類学的研究」史学研究会、2011年4月17日、京都大学。

⑩ Zenno Miho, “Una experiencia de investigación etnográfica en la Ciudad de México,” Seminario del Posgrado en Humanidades y Ciencias Sociales, 2011年3月11日, Universidad Autónoma de la Ciudad de México (メキシコ)。

⑪ Zenno Miho, “San Jerónimo Lídice, un pueblo que se convirtió en colonia residencial: un estudio de caso,” Seminario Etnografía de la Cuenca del Valle de México, Universidad Autónoma de México (メキシコ)。

⑫ Ishibashi Jun, “Canto necesario otra vez : Movimiento musical para transformación social en la Venezuela bplivariana,” Latin American Studies Association XXXIX International Congress, 2010年10月9日, Sheraton Hotel, Tronto (カナダ)。

⑬ 新木秀和「コリア政権誕生にいたるプロセスから現在まで」シンポジウム「石油依存社会に対するアマゾンからの挑戦」、2010年9月6日、上智大学。

⑭ 青木利夫「メキシコにおける多文化主義と先住民教育」比較教育学会第46回大会、2010年6月27日、神戸大学。

〔図書〕(計2件)

① 鈴木茂編『グローバル化時代における南北アメリカの国家・市民社会・社会運動—研究成果報告書』東京外国語大学、2013年、398頁。

② 青山和佳・受田宏之・小林誉明編著『開発援助がつくる社会生活—現場からのプロジェクト診断』大学教育出版、2010年、234頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鈴木 茂 (SUZUKI SHIGERU)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：10162950

### (2) 研究分担者

中條 献 (CHUJO KEN)

桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授

研究者番号：50227336

石橋 純 (ISHIBASHI JUN)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号：70323318  
新木 秀和 (ARAKI HIDEKAZU)  
神奈川大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：80276039  
後藤 雄介 (GOTO YUSUKE)  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号：60296374  
青木 利夫 (AOKI TOSHIO)  
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授  
研究者番号：40304365  
禪野 美帆 (ZENNO MIHO)  
関西学院大学・商学部・准教授  
研究者番号：20365480  
受田 宏之 (UKEDA HIROYUKI)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・准教授  
研究者番号：20466816